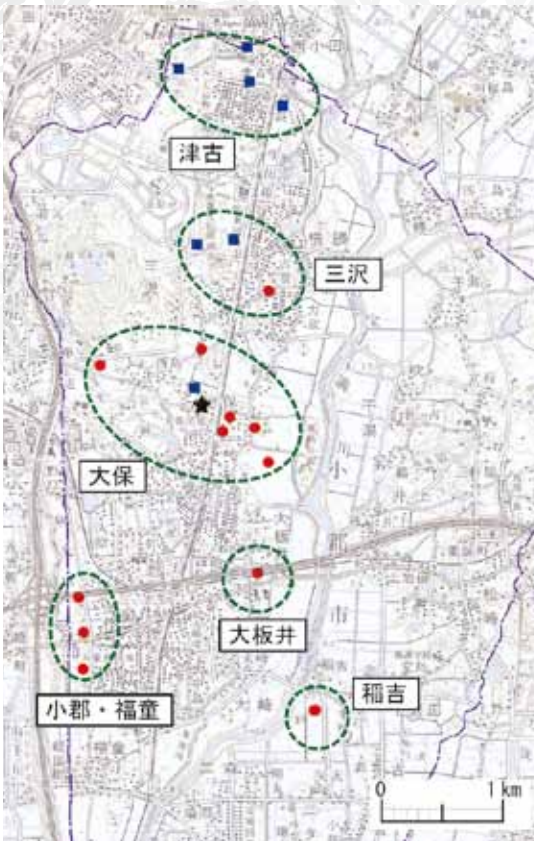


発見! おごおり遺産

No.18 合戦後の復興のあゆみ

「大保原合戦」の戦場となった小郡ですが、合戦後すぐに人々の営みが再開されます。困難に立ち向かう当時の人々のようすを見てみましょう。



中世小郡の遺跡分布図



善現寺の基礎石



青銅製懸仏

前

回で紹介した「大保原合戦」(大原合戦)では、南朝方・北朝方

両軍合わせて数万人規模の軍勢がここ小郡で戦いました。当時は、これまで発掘調査の成果から、津古・三沢・大保・小郡・福童・大板井・稲吉を中心に集落が存在したと考えられますが、その多くが合戦のあった14世紀後半に集落活動を終えたことが分かっています。つまり、この合戦は人々のくらしにとっても大きな影響を与えました。

しかし、合戦後すぐに人々は活動を再開します。前回も触れた「善風寺」は、ひまわり館東野周辺に存在したと考えられる寺です。江戸時代前期の延宝三年(一六七五)に、真辺仲庵^{まへちゆうあん}によって書かれた久留米藩初の地誌『北筑雑纂』^{ほくちくざっさん}には、「合戦後に、南朝方・北朝方が力を合わせて亡くなった人の遺骨を納め、側に寺を建てて、仏事を行った」との記録があります。また、江戸時代中期の『寛延記』には、「善法堂跡」という名前が登場します。

これまで「善風寺」の実像は不明でしたが、近年の発掘調査によって、徐々にその姿が明らかになってきました。

三沢寺小路遺跡^{さんざわじどうじ}では、幅2m、深さ1mの区画溝と、東西71×74m、南北25m以上の大型区画が確認されました。区画の内側からは多くの瓦が見つかり、ここが寺の中心であった可能性も考えられます。

この遺跡からやや南東に位置する大保西小路遺跡^{おほほろじ}では、十五世紀の集落が確認され、青銅製懸仏や五輪塔などの仏教関係遺物が見つかっています。

一方、八坂にある善現寺^{ぜんげんじ}には、貴重な基礎石(五輪塔)があります。これには「善現寺」という寺の名前と「照翁」という和尚の名前、そして正平二十年(一二六五)の年号が刻まれています。つまりこれは、大保原合戦から六年後に寺が開かれたことを意味し、市の南部にも未発見の集落が広がっていることが想像できます。

新型コロナウイルスの影響で先行き不透明な現在ですが、私たちはこれまでも大きな戦乱など、何度も困難を乗り越えてきました。今回も一人ひとりの強い意志で、この難局を乗り切りましょう。

問合せ先 文化財課 ☎75・7555

おごおり遺産とは?》》近年の市内調査で「再発見」した文化遺産=市民のたからのこと